

## 「反」CALL 論

### 境一三

(『Laterne』101号、同学社、2009年3月、16-18ページ)

実のところ私はもう CALL には関心がない。こう書くと、では何でこのような原稿を引き受けたのだ、と糾弾されるかも知れない。そこで、自分の気持ちをもう少し正確に表現するならば、日本で言われるところの「CALL」には食傷して、興味が失ってしまったというところだろうか。

これはいろいろな場所で語り、また書いてもきたのだが、日本では CALL に対する誤解が根強く、それがなかなか変わる気配がない。

CALL とは言うまでもなく Computer Assisted Language Learning の謂いで、力点はもちろん Language Learning にある。それは「言語学習」であり、様態としてコンピューターに助けられているに過ぎない。

しかし、日本の CALL が LL (= Language Laboratory) で行われてきた学習の、甚だしくは設備としての LL の代替物として捉えられ、そのリプレースとしていわゆる CALL 教室が設置されてきたことが不幸だった。LL 装置を作ってきた会社では、自分たちの納入した装置が更新時期を迎える時には、当然のことながら今度は「CALL」を導入させようとした。多くの場合「CALL」は「コンピューター付きの LL 教室」と理解されたのである。

LL はスキナー流の心理学にもとづいて、反復練習によって習慣形成をするものであるから、学習者はヘッドセットを付けて聞こえてくる音に対してひたすら反応を繰り返した。個別学習が標榜され、一人に一台が割り与えられた。

日本流「CALL」が LL を引き継いでしまったことは悲しむべきことだ。LL のイメージを引きずったまま、一台のコンピューターの前に一人が座り、黙々と練習問題をこなすという絵柄が定着してしまったのである。

しかし、CALL の定義からは、一人に一台が割り振られなければならない、ということでは導き出されない。一台のマシンの前に数人が座って、それを活用しながらディスカッションしても、それは CALL なのである。実際外国ではこうした CALL の例も報告されている。

また、一人一台の個別学習というあり方は、素晴らしい教材ができあがれば、外国語学習のすべてが計算機化され、やがて人間の教師は要らなくなるという幻想をももたらした。いわゆる「CALL による省力化論」である。もちろん機械による省力化を全否定することはできない。確かに多くの文法教科書に見られるような説明と「機械的」な練習問題であれば、マシンによる学習だけで十分だろう。問題は、そこで空いたマンパワーをどう活用するかである。

さて、自動化されたドリルなどの対極に位置するのが、インターネットを活用した「調べ学習」を内実とするプロジェクトワークや、オンラインの掲示板などによ

るメタ認知活動である。

ところで、そもそもなぜドイツ語を学ぶのか。それはドイツ語を使って何らかの社会的活動ができるようになるためではないか。経済の学生ならば、例えば経済についての問いをグループで立て、その解決のためにドイツ語のサイトを調べ、テキストを理解し、議論し、その結果をドイツ語で発表するというようなことだろう。だとするならば、そうした活動こそ教員が手助けして教室で行なうべきものだろう。そのような経験もなく、単なる文法訳読の学習だけで、ドイツ語による社会的行為が可能になるとは思えない。幸いに、社会的構成主義に基づくプロジェクトワークについては研究が進み、1年目の学習者に対してもさまざまな試みがある。

もう一つ重要なのは、「学びを学ぶ」ことである。教育の究極的目的が「自律的学習者の養成」にあるとするならば、言語教育の目的も「自律的言語学習者の養成」に他ならないだろう。そのために、学習者が自分たちの学習について考察する場は必要不可欠である。学習者がそれぞれの学習について「振り返り」、オンラインの掲示板に「気づき」を書き込み、相互に交流することは、個のメタ認知活動を越えた社会的メタ認知活動になる。

このような活動が行われる場としての Learning Management System (LMS) が、現在情報コミュニケーション技術 (ICT) を活用した学習でもっとも注目を浴びているところである。日本流の「CALL」からはずいぶんと遠いところまで来たが、これも広義には CALL の領域に入る。私が今もっとも関心を持っているのは、このような学習環境論としての CALL 論なのである。